

神宮外苑：都民皆様へのメッセージ

蓮舫さん外苑視察時（6月8日）に、石川が作成した配布資料に追記

1. 100年前に、国民がつくった杜

2. 内苑・外苑は世界遺産クラスの文化的資産

（東京の文化的世界遺産、フランス人の建築家コルビジェの西洋近代美術館がONLY ONE）

3. 東京の国際都市としてのプレゼンスの回復

ユネスコの諮問機関イコモスから発出されたヘリテージアラートの無視

2024年 6月 13日

東京大学名誉教授、日本イコモス理事

石川幹子

イコモス ヘリテージ・アラート(2023年9月7日)

東京・神宮外苑の都市林に差し迫った脅威。 再開発により3.4ヘクタールの公園と約3,000本の文 化的資産としての樹木が失われる

イコモスは、日本国内委員会 (ICOMOS Japan) および国際文化的景観委員会 (ISCCL International Scientific Committee on Cultural Landscapes) と共に、2023年9月に予定されている神宮外苑再開発計画 (3,000本以上の樹木の伐採計画を含む) の撤回を求めるヘリテージ・アラートを発する。これは、17世紀から続く東京における「庭園都市パークシステム」の中核を保全し、継続させるために不可欠なことである。

再開発において計画されている3棟の高層ビルの建設と、既存の野球場とラグビー場の新球場への建て替え・移転は、過去100年にわたって形成され、育まれてきた都市の森を完全に破壊することにつながる。

事業者は、三井不動産株式会社、明治神宮、日本スポーツ振興センター、伊藤忠商事株式会社である。東京都は、都民や関係者との適切な対話もないまま、この再開発計画を承認した。

都市公園は人々の憩いの場であると同時に、豊かな生物多様性の維持にも貢献している。都市のヒートアイランド現象を緩和し、大地震などの自然災害時の避難場所にもなる。神宮外苑は、市民の寄付と奉仕活動によってつくられた、世界の都市公園史上類を見ない優れた文化的資産である。

以上を踏まえ、イコモスはこのヘリテージ・アラートを発し、以下を要請する：

都民の皆様へのメッセージ ①

神宮外苑の“兄弟イチョウ”は146本です。
新宿御苑の銀杏から、南豊島御料地（現在の神宮内苑）で折下吉延先生が、苗木を育てられ、外苑に植栽。
現在、仲良く114歳になりました。
すべてをまもらなければなりません。
“仲良し兄弟・姉妹”を、私たちの世代が、引き裂いてはいけません。

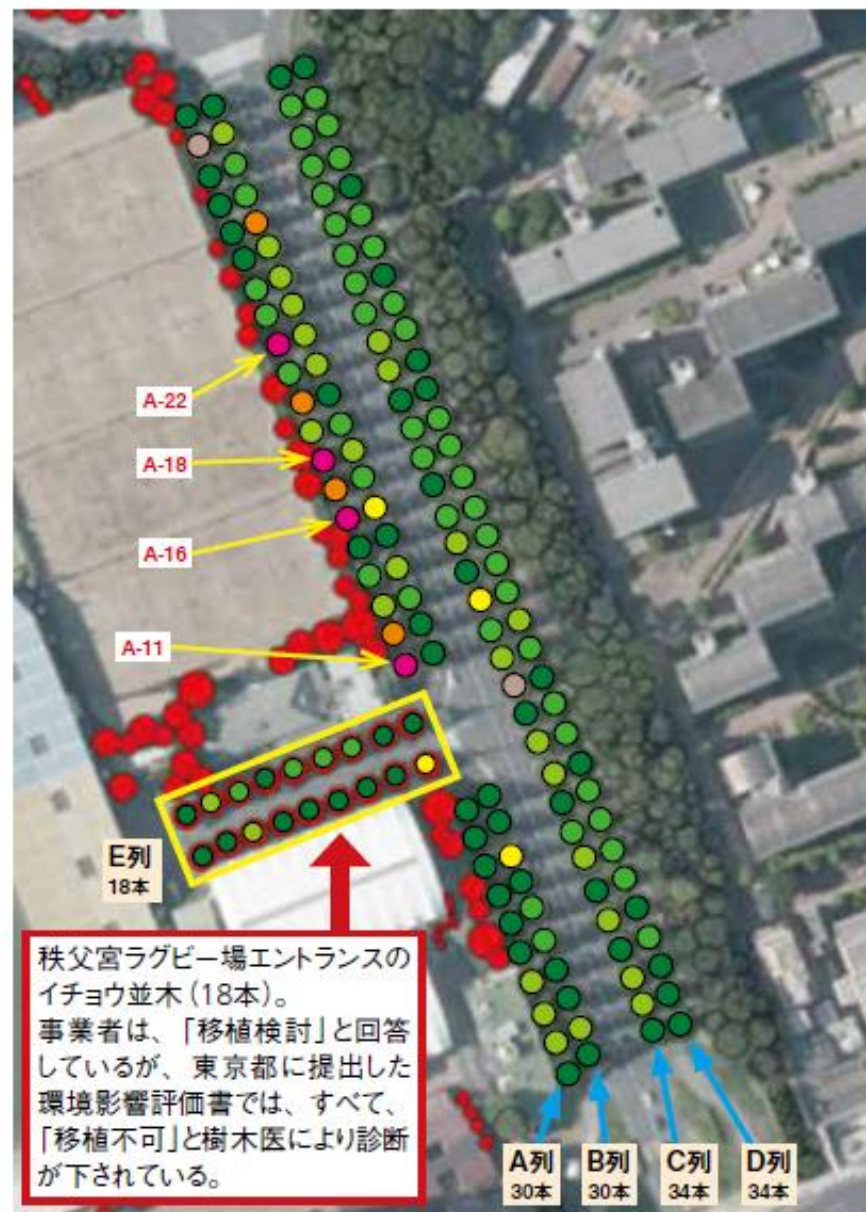


- ・ 外苑のイチョウ並木は、世界から、多くの人びとが訪れています。
- ・ プロジェクト・マッピングとの比較
費用：ゼロ
夜だけではなく、24時間。こどももお年寄りも。
- ・ 癒し、ヒートアイランド緩和

地球温暖化が直撃しているイチヨウ並木

2023年11月調査

評価	本数	内容
健全	a + ●	48本 樹形・樹勢・先端部の状況・枝の伸長状況と緑量、地上部の状況など、極めて良好であり、健全。
	a ●	56本 樹形・樹勢・先端部の状況・枝の伸長状況と緑量、地上部の状況など、良好であり、健全。
	a - ●	28本 樹形・樹勢・先端部の状況・枝の伸長状況と緑量、地上部の状況など、良好であるが、一部、生理的バランスの崩れ、剪定による樹形のバランスの崩れ、過度の利用等により問題が生じている。
良好	b ●	4本 樹形・樹勢は比較的良好であるが、先端部が枯損しており、今後の慎重な経過観察が必要である。個々の樹木の問題に対し、データ分析を行い、適切な維持管理方針の策定と実施が必要である。
要注意	c ●	4本 樹形・樹勢・先端部の状況・枝の伸長状況と緑量など、衰退がみられ、今後、環境の変化により、生育に重大な問題が生じる可能性がある。現在の問題の分析を行い、イチヨウの持続的生育のために、適切な維持管理施策の導入を早急に行う必要がある。
著しく枯損	d ●	4本 樹形・樹勢・先端部の状況・枝の伸長状況と緑量に大きな問題が生じており、一部では完全に枯損している部位が生じている。円錐形の外苑における「イチヨウの樹形」を回復することは、不可能となっており、今後の対策について、検討が必要である。
梢の形態の著しい変化	e ●	2本 樹木全体は、概ね健全であるが、先端部の形状に著しい変化が生じており、外苑特有の「円錐型のイチヨウ」の樹形を回復することは困難となっている。今後、樹形については、根本的な検討が必要である。
合計	146本	



神宮外苑いちよう並木 位置図。●は伐採もしくは移植が予想される樹木

都民の皆様へのメッセージ：②

国民の献木・献金・勤労奉仕で創られ、100年間、継承されてきた森は、かけがえのない財産です。

伐採をせずに、内苑と外苑の森が、共に手を携えて、次世代のこども達に手渡していくことができるよう、皆さんで、提案できるプラットフォームを創りましょう。

消滅する建国記念文庫の森

去年はナンジャモンジャ（ヒトツバタゴ）満開でした。
ここは、ラグビー場となり、完全に破壊されます。



都民の皆様へのメッセージ ③

これらのことを、実現するために
これまでの経緯の「情報公開」を再度要請します。

再開発事業の目的も、この間、

- ・ スポーツクラスターの形成
- ・ 良好な市街地の形成
- ・ 内苑の緑を守る

と、変更につぐ変更が行われてきました。

情報公開により、事実を確認し、多くのステークホルダーの参加、意見を踏まえて、外苑の未来を考えていきましょう。

都民の皆様へのメッセージ ④

内苑と外苑は、公園道路で結ばれ一体的に、国民の協力により創り出されました。現在でも、「準公園」として位置づけられています。したがって、

- ① 内苑のために外苑が犠牲となることは、あってはならないことと考えます。
- ② 共に生きていく道を、皆様と叡智を絞り、見つけ出していきましょう。

専門家としての意見 その1

(東京大学名誉教授：農学博士、石川幹子)

事業者は、市街地再開発事業の“大義”を「内苑の緑をまもるため」というておられます。内苑の緑の危機の本質を、全く御存知ない御発言です。

内苑の緑は、深刻な「水資源の枯渇」という問題を抱えています。二つの小川はすでに枯れてしまいました。北池は冬季には、地底が露出するほどの深刻な水不足です。

100年の森形成のモデルは、「台地エリア」のもので、武蔵野台地の「谷エリア」には対応していないため、深刻な森林の衰退が進んでおり、これに加えて「ナラ枯れ」が直撃しています。天下の名水・清正井を未来につないでいくためにも、根本的問題への対処が必要です。

創建当時、現在の代々木公園は練兵場だったため、雨水の内苑への流入が生じないように、排水工事が行われました。

現在、代々木練兵場は豊かな森林公園となりました。遮断されている隣接する代々木公園の雨水の還流など、地域連携の検討が必須です。

水不足、ナラ枯れで危機に瀕している内苑の緑は、超高層ビルをたて、地代を稼いでも、解決できない本質的問題が横たわっていることを、事業者は認識すべきです。この解決には、専門家の科学的知見に耳を傾け、市民、東京都、国との連携が必須です。

専門家としての意見：その2

原形をとどめない、悲惨な移植
樹木の実態

新国立競技場の建設により失わ
れた明治公園の森



2014年 6月1日 撮影

新国立競技場の建設により失われた明治公園の杜 大地との連関を絶たれた持続的成長の困難な杜 2014年～2022年



建設前の樹木総数（高木のみ） **991本**（2014年）

新国立競技場建設により伐採された樹木 **742本**

移植計画（2014年：高木のみ） **219本**

移植樹木の現地確認（2022年3月13日） **151本**

（移植樹のプレートのある樹木及びプレートは失われているが、
移植樹と判断できる樹木を含む本数）

結果

1. 既存の樹形を活かし、活力のある移植樹は、
スタジイ1本、ヒマラヤシーダー2本のみ
2. 移植樹（赤）
 - ①強剪定が行なわれ、樹形は原形を留めていない。
 - ②森林生態の基礎的構造が再生されていないため、現実には存在し得ない、
様ざまの樹種の混在する樹林地となっている。
 - ③土壌も適切ではないため、持続的成長が困難となっている。
 - ④ 樹勢が衰えているため、葉が黄変している。
 - ⑤千駄ヶ谷方面は、人工地盤上に植栽されており、土壌の厚さが高木を支える
深度がないため、中木の植栽に限定されているため、当初の計画とは
全く違った森のないエリアとなっている。
 - ⑥ 地被：気象・水分・土壌への配慮が行なわれていないため、すでに枯死
しているエリアが全地区にあり、特に青山方面からのメインゲートの
エリアは、枯死しているエリアが広範に広がっている。
3. 渋谷川：競技場の屋根の下となっており、日照なし、流れは断片的。
「春の小川」の再生とは、ほど遠い状況となっている。

新国立A地区



A地区
メトロ
国立競技場駅近く
移植樹木数：18本

・移植樹木 18本

・巨樹のクスノキ、シラカシ、ケヤキ、イロハモミジ等が強選定が行われ、電信柱の状態に密植されている。トウネズミモチなども混植されており、武蔵野の常落混交林の構成種とはなっていない。

・これらの巨樹を支える土壌は、本物の土壌である必要があるが、**軽量土壌**であるため、水分の吸収・蒸散の時間差が短いため、樹木が十分に水分を取り込むことができず、生育が不良となっている。常緑広葉樹は、**葉が黄変**しており、落葉樹は、枝先の枯死がみられる。

・森林生態系への基本的配慮が完全に欠落しているため、地被（ヤブコウジ：黄変）、低木層（サツキ等、武蔵野の常落混交林には出現しない。間違い）、中木層（ヤツデ、枯死）など、単なる「寄せ集め」の、成長していくことのできない樹林となっている。



ヤツデ

日陰に生育する樹木であるが、生育環境が不適切であるため、葉が枯死しつつある。



地被：ヤブコウジ、シャガ
林内の日陰に生育する植物であるため、枯死しつつある。

クスノキ
電信柱状の樹形
胴吹き：
根が正常に動いていないため樹勢を維持するために、胴から枝をだし、クスノキが、必死に生きようとしている姿



新国立B地区

- ・移植樹木 24本
- ・ 絵画館に隣接する重要なエリア。多くの移植樹木が植栽されている。シラカシ、ケヤキ、イロハモミジ、モクセイ、コナラ、イヌシデ、モッコク、マテバシイ、ヤブツバキ、クスノキなど。

- ・ これらの巨樹を支える土壌は、本物の土壌である必要があるが、**軽量土壌**であるため、生育が不良となっている。常緑広葉樹は、**葉が黄変**している。
- ・ ヤブツバキは、開花の季節であるが、十分に開花することが出来ない状況となっていた。



移植されたマテバシイ

葉が黄変している

撮影2022年3月13日

・ 移植樹木 45本

多くの移植樹木が植栽されている。
モッコク、シラカシ、ケヤキ、イロハモミジ、
アラカシ、ヒマラヤシーダー等。

植栽帯の幅が狭いこと、及び**軽量土壌**であるため、生育が不良 となっている。

以下の写真（左）は、シラカシであるが、**葉が黄変**している。緑量もなく、シラカシ本来の樹勢となっていない。（2022年3月13日撮影）

新国立 C 地区

